話題提供

障害学生の4年間を支えるための大学作り

～障害学生と教職員の対話に視点を当てて～

自己紹介（障害の紹介）

- 宮城教育大学　特別支援教育教員養成課程
  聴覚・言語障害教育コース
  ４年　真壁詩織

- 聴覚情報処理障害（APD）があると
  大学1年生の時に判明

聴覚情報処理障害（APD）とは？

- **「音は聞こえているのに、言葉として理解できない」**というもの。聴力や、言葉の理解に問題はないのですが、よく聞き返したりします。

（APDの一般的な困りごと）
・聞き返しや聞き誤りが多い
・雑音の多い場所で聞き取りが難しくなる
・口頭で言われたことは忘れやすい
・早口や小さな声が聞き取りにくい
・長い時間注意して聞き続けるのが難しい

聴覚情報処理障害（APD）とは？

- APDは、三つの要因から起こり、同じAPDでも人によって違いがあります。

①**疾患**　　発達障害、精神障害、注意や記憶の機能が少し弱いなど

②**性格**　　気を遣いすぎる、素直、ストレスを溜めやすいなど

③**環境**　　ざわざわした場所、話し手の人数が多いなど

（私の場合）
発達障害の診断には至らないものの、**「注意」の機能が弱い**ようです。
ざわざわした場所、多人数の会話など、聞き取る環境によって、聞き取りの困難が起こります。

聴覚情報処理障害（APD）とは？

- 困りごとと対処法の例

話者以外に注意が向いている時に、音声は聞こえるが、意味の理解はできない

→

音声が聞こえれば注意を向けるが、注意を向ける前に言った言葉はわからないので聞き返す、またはもう一度初めから教えてもらう

このほか、大学の講義では補聴器とロジャーマイクを使い、耳に直接音声を届けることで、注意を向けやすくしていた

あらすじ

- 大学1年生前半、**障害を知る**
  ･･･はじめての相談、診断を受ける、はじめての支援
- 大学1年生後半、**開き直る**
  ･･･支援をうまく使う、身の回りを考える
- 大学2年生、**戸惑う**
  ･･･障害を説明できない、話せない、支援が申し訳ない
- 大学3年生、**受け入れる**
  ･･･支援を使いこなす、障害を説明する、当事者に出会う
- 大学4年生、**研究する**
  ･･･自分の障害を研究する

①障害を知る

- 特別支援の講義を受け、「長年悩んだこの聞き取りにくさももしかして障害なのか？」と調べてみる→「聴覚情報処理障害」という障害があることを知った
- 勇気を出して松﨑先生に相談する→親身に話を聞いてもらえた。他の先生を通し、病院を紹介される
- 病院で診断を受ける→「自分は障害があったのだ」と知る

〈ここでのポイント〉

・障害のことを知るきっかけがあった
・「この人に相談すれば何かわかるだろう」と思える専門の先生がいた
・病院（専門機関）へのつながりがあった

①障害を知る

▶このとき「相談したい」と思ったきっかけは･･･

障害に対して、ネガティブな考えしか持っていなかったが、自分と変わらず（自分よりアクティブに）生活する、障害のある先生や友人に出会う

➡「自分は障害があるかもしれない」＋「障害があることは必ずしも悪いことではないのかもしれない」

➡相談してみよう

②開き直る

- 自分は障害があるのだと知り、「苦労の外在化」が進む→友人に困りごとを伝え、人混みなどを避けて生活するように
- 支援（FMマイクの貸し出し、紙資料の配布）を受け、格段に講義が受けやすくなる
- 「障害があるとわかって良かった」と安定した状態

しかし、この安定した状態は一時的なものだった

③戸惑う

- **戸惑い①「障害があるということは･･･」**

  今まで気づかなかった周囲との「違い」「差」に戸惑う

  身の振り方がわからない（自分も謙虚に歩み寄るべきなのだと気づけない）

- **戸惑い②「私の欲しい支援はなにか？」**

  手話やテイク、必要のない支援の断り方がわからない

  「して欲しいことを言ってもらえないと、こちらも支援できない」と言われるが、自分でもわからないので、堂々巡り

③戸惑う

- **戸惑い③「支援を受ける以上は･･･」**

　支援を受けるなら、講義を真面目に聞かなくてはならないというプレッシャー

　文句を言ってはいけないと思い、欲しい支援が言えない

- **戸惑い④「私は支援を求めてもいいのか？」**

　支援を受けると、申し訳ない気持ちになる

③戸惑う

〈ここでのポイント〉

・これらの戸惑いはずっと内に秘めており、「同じように考えている障害学生と話をした」ことで話せるようになった

・色々な支援を試してもらえたので、何となく自分でも必要な支援がわかってきた

・悩みを話したいとき、話せる環境があった（支援室）

③戸惑う

- **このとき「話したい」と思ったきっかけは･･･**

ある友人が、「私たちにはサボる権利がない」という話をする。

（支援を受けたとき、ずっと一生懸命に聞いていて、眠くても頑張らなければならないが、他の人は聞き流したり、違う作業をしながら聞いていたりする。自分たちにはそれができない）

➡「そういうことを考えてもいいんだ」と衝撃を受ける

➡ 同時に、卑屈になりすぎていたと気づく

④受け入れる

- （きっかけがあったわけではなく、慣れから）支援を求めることができるようになってくる
- （聞いてもらえた経験から）自分の障害について、積極的に説明しようとする
- 発想を転換し、自分の障害を利点と考える
- 当事者会に参加することで、ますます「障害」という意識が強くなる

④受け入れる

〈ここでのポイント〉

・「開き直る」のと「受け入れる」のは違うと感じた

・3年目にしてようやく、支援に慣れ始めた（求めるのも受けるのも）

・同じ障害に悩む人と話をして、今まで曖昧だったものが確信に変わった

④受け入れる

- 自分の障害を積極的に説明しようと思ったきっかけは･･･

➡自分に必要な支援（大切なことは紙に書いてもらう、聞き返して確認するなど）がわかってきたので、学校外でも説明をした

➡経験が積み重なり、説明書を作るなど、工夫できるようになった

➡相手もそれを受け、一緒に考えてもらえることで、さらに理解が進んだ

良い循環が生まれた！

⑤研究する

- いよいよ、自分の困りごとを日頃から研究し、自分の障害について理解を深めていくことに
- 「当事者研究」について勉強した
- 説明をよりわかりやすく行なうために、説明書を作った

〈ここでのポイント〉

・「当事者研究」の存在と有用性（実は名前だけは1年生の時から知っていた）

・参考になる情報を集めることができる環境

まとめ～ありがたかったもの～

- まず前提として、「相談できそうな人」が誰か、見えていた
- 病院（専門機関）に繋いでもらえた
- 必要な支援がわからなくても、色々試させてもらえた

前提となる環境が整備されている！

- 困ったら相談できる人がいる（先生、支援室、先輩）
- 話を聞いてもらえる機会があった（支援室の面接）
- アウトプットする機会があった（講義、当事者研究）

自己表現する機会が保障されている！

まとめ～必要だと思ったもの～

- 自分の力で説明できるようになるまで、時間と根気と協力者を要する
- 説明できるようになるまでの間、助け（友人など）が必要
- （先輩方の実例など）資料があったほうがいい
- 様々な心理的問題があることをわかっている
- 一人の立場（先生、お医者さん）から受け取れる情報は限界があり、色々な立場の人と話す機会があるほうがいい

情報共有すべきこと

- **障害学生の置かれている現状**

　自分でも障害を説明できない、必要な支援がわからない、自分が支援を受けて良いのかどうかもわからない、障害について情報が少なすぎるのでそもそも以上のことに気づけていないなど

- **支援者は誰か**

　1人でできることは少ない。どんな障害かということを、よく知って、一緒に考えてくれる支援者が、きちんと見えていることが心の安定につながる

言われてしんどかった語録

- 「どんな支援が必要なのか言ってくれないと、こっちも何をしてあげれば良いかわからない」（友人）

  →私もわからない･･･。

- 「耳が聞こえないのですか？」（先生）

  →上手く説明できず伝わらない･･･。

- 「自分で言わないとわからないですよ」（先生）

  →自分から障害のことを説明したくない･･･。

言われてしんどかった語録

- 「障害とはいっても、大したことはないんでしょ？」（母）
  →大したことはある･･･。

- 「障害があるようには見えない」（知人）
  →そう言われても･･･。

- 「支援してもらっているのに、迷惑がるのはおかしい」（友人）
  →支援は全てありがたく受け取らなければならないのか？

言われて嬉しかった語録

- 「今までひとりでがんばってきたんですね」（松﨑先生）
  →はじめて相談しに行ったときそう言われてとても救われた。

- 「じゃあ大変だったんだね」（先輩）
  →そう言われると認められているような気がするので嬉しい。

- 「今は、どうですか？」（支援室、友人）
  →自分でも必要な支援がわからない私に、色々な場面で聞いてくれた。逐一確認してもらうことで、必要な支援が見えてきた。

言われて嬉しかった語録

- 「わかる」（当事者会）

　→困ったことを話す時、もちろん「大変だね」と共感してもらうだけでありがたいが、同じ障害のある人にこの一言を言われたときの嬉しさや安心感は、障害を考えるうえで大きな力になる。